

総合的な学力を育む学力調査の研究開発 －SASA2015（第64次福井県学力調査）の試み－

調査研究部 学力調査分析ユニット

三谷 和範 浦井加容子 黒川 一 河合 正孝
青木 晶子 吉田 香織 宮内 文範

昨年度、SASA（福井県学力調査）を、時代の要請、新しい学力観に照らし、これからの社会を生きる子どもたちに必要な力を測ることができるものに改善するために、「C チャレンジ問題」の導入を始め、様々な試みを行った。今年度は、昨年度の課題であったCチャレンジ問題の成熟、情報発信力の向上について、研究・実践を進めると同時に、集計・分析システムの刷新等、新たな取組みを行った。

〈キーワード〉 SASA2015、C チャレンジ問題、非認知能力、通信型研修

I 前年度までの取組みについて

SASA2014（第63次福井県学力調査）では、新しい試みとして、マトリクスの作成に基づく問題出題設計と「C チャレンジ問題」の新設、学級集団の状況と学力との関係を捉えるための質問紙内容の改訂を行った。

マトリクス作成に基づく出題設計は、4月に行われた全国学力・学習調査で課題が見られた内容について出題したり、小6における課題を中3で問い直したりと、課題克服に向けた早期の対応を可能とした。「C チャレンジ問題」では新しい学力を測るための出題を具現化し、さらなる授業改善の促進に寄与したといえる。質問紙の調査結果からは、「共生力」と学力の相関が示された。これらの新しい試みは、課題克服に向けた早期の対応が可能になった、学力向上に向けた検証・改善サイクルを加速させた、良好な学級集団のすがたが具体的に見えてきたという成果を上げたと考えている。

さらに、昨年度は、SASA2013報告書での実践と検証を協力校9校に依頼し、実践と検証を行った。報告書にある指導例について、実践した後、ある程度の期間をおいて、課題となった問題に関して再調査を行った結果、正答率が大幅に向上しているものが多く見られ、その発信に力を入れるべきであるとの方向性を得た。

II SASA2015の特徴

1 調査問題の構成と問題作成ワーキンググループについて

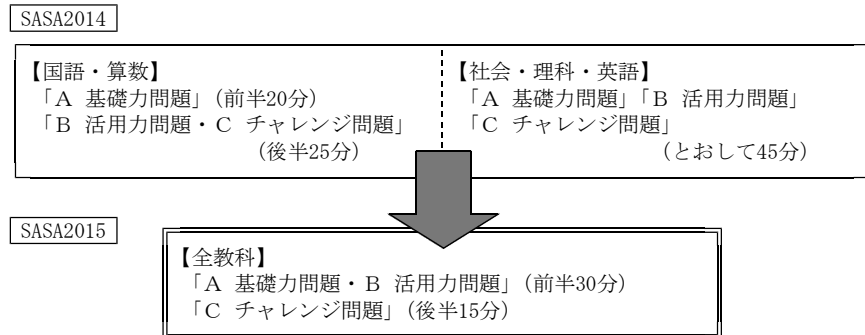
昨年度は、「C チャレンジ問題」が新設され、問題タイプが3つになった。国語・算数／数学においては「A 基礎力問題（以下 A問題）」と「B 活用力問題（以下 B問題）」＋「C チャレンジ問題（以下 C問題）」という区分で調査を実施したが、基礎力と活用力は密接に関わっており明確に切り離せないことや、思考のプロセスを重視した問題作成のために、A問題とB問題を組み合わせた。

また、領域や観点を融合した総合的な力を測るというC問題の特性を生かすことや、児童・生徒がじっくり取り組む時間を保障するために、C問題を別枠に設けることとした。

また、問題作成にあたっては、SASA2014（第63次）のワーキンググループ（以下 WG）の構成メンバー（県教育庁指導主事等（2名）、教育研究所員（2～3名）、県内小・中学校教員（3名））に加え、SASA2015（第64次）では、C問題の質の向上をねらいとして、問題作成のアドバイザーに小・中学校教育

研究会部会長（各教科1名）が加わった。C問題に対する助言の他、児童・生徒にこれから身につけさせたい力や、それを培うためにどのように授業改善を行っていくべきかということをとともに協議することで、C問題の質の向上に加え、問題作成の意図が学校現場での授業改善に生かされることにつながった。

資料1 SASA実施の際の時間区分（小学校の場合）



2 「C チャレンジ問題」の進化

昨年度の研究において、導入されたC問題がこれからの時代を生き抜くために必要とされる力を調査するとともに、その力の育成につなげることができるものとなるために、主に以下の課題が挙げられた。

まず、「C問題の位置づけ」である。昨年の問題作成において、「C問題で求める力とは何か」、「B問題との相違点は何なのか」など「C問題」の定義をどう問題に反映するか常に問われ、試行錯誤が続いた。今年度の取組みにおいては、この点を明確にしつつ、C問題の質の向上を図ることが問われている。

次に、「C問題の活用推進」である。C問題は、活用力を包括しつつさらなる総合的な力を測る発展的な問題であり、その結果分析を受けて児童・生徒の学力向上に寄与するものとするために授業改善を求めるものである。C問題で問われている力を身につけるためには、日頃どのような授業を展開すればよいか、授業改善につながるような活用のしかたを考える必要がある。

これらの課題を踏まえ、今年度のC問題作成・活用における取組みを以下に示した。

(1) 「C チャレンジ問題」の位置づけの明確化

B問題とC問題の相違点を明らかにするために、今年度はC問題を「実社会の生活の中で直接生かせるような総合的な問題」と位置づけた。生活の中で生かすことを前面に出すことによって、C問題の位置づけが明らかになり、このことは、問題作成の方向性を定める際にも、一つの指針となった。

資料2 C問題の位置づけ（実施要項より）

<p style="text-align: center;">実社会の生活の中で直接生かせるような総合的な問題</p> <p>実社会の中で日常的に見られる事象の中に見られる課題で、一見したところでは何をいれればよいか分からないような時に、教科の視点を持ち込むことで解決できるような問題</p> <p>必ずしも豊富な知識や高い技能を必要とするものではなく、一般市民が生活していく中で、考えたり感じたりしていることを、児童・生徒レベルに合わせた問題</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇領域、観点を越えた・跨いだ・融合した問題 ◇総合的な力を測る問題 ◇複合・融合問題 ◇俯瞰的・鳥瞰的な観点に基づく原理・原則的なことに関わる問題 ◇PISA、TIMSS等を参考にした問題 ◇問題に取り組む、問題を解くベースの力を測る問題

(2) 「C チャレンジ問題」サンプル問題の配信

昨年度は、C問題を通して、これから求められる力を提示し授業改善を促した。C問題の意図するものを、日頃の授業に生かしていくため、さらに、授業改善の取組みの成果をSASA2015にて測るため

に、今年度は、各教科におけるC問題出題設定の意図に合致するサンプル問題を作成・配信した。サンプル問題は、教育研究所のホームページ（以下 HP）に掲載し（9月）、各学校でサンプル問題をダウンロードして授業に活用できるようにした。

サンプル問題を作成するにあたって、アドバイザーの京都大学石井英真准教授から以下のようなアドバイスを受けた。

- ・疑問から始まるストーリー仕立ての長い学習プロセスを意識した問題を。
- ・教科特有の探究プロセスを踏まえた問題構成を。
- ・「唯一の正解」を問うだけではなく、「最適解」「納得解」「複数解」を問う問題も。
- ・記述問題の解答例では、正答の基準だけでなく、学習の質を高めるという視点から、どのレベルが望ましいかを示す。

これらのアドバイスは、サンプル問題のみではなく、本調査のCチャレンジ問題の作成の際にも生かすことで、問題の質の向上を図ることができた。

(3) ワーキンググループでの取組み

① 中学校英語ワーキンググループ

テーマ「**実社会に存在する判断を迫られるような場面や状況を考慮しながら、伝えたい内容を表現する**」

文部科学省が2013年12月に公表した「グローバル化に対応した英語教育実施計画」により、全国的な英語力調査など様々な取組みが行われてきた。そしてその中で、中学生・高校生の英語力は、「話す」「書く」力に関する課題が大きいことが明らかになり、対策を講じる必要性が声高に叫ばれるようになった。また、国際社会の中では、自分の意見・考えをその理由や根拠に基づいて相手にわかりやすく伝える力もますます必要とされてくる。

そこで、C問題を作成するにあたり、実際の社会生活で起こりがちな場面を想定し、複数の情報を基にして判断し、自分の考えを理由とともに英語で表現する力を見る問題にしようという方針を立てた。

今回、新たに取り入れたのは、リスニングとの融合である。また、活用力を見るためのいわゆるB問題との差別化を図るため、そして、理由や根拠を述べる力を見るため、条件に合致する複数の解答から生徒に1つ選択させることにした。

以上を踏まえ、問題の場面設定を「中学生の姉弟が、祖母の誕生日が目前に迫っていることを思い出し、何を贈ればよいか話し合う」とした。問題構成は、二人の「会話」を聞き、店の「広告」と祖母の毎日の様子に関する「メモ」という複数の資料を参考に、贈り物を選んで理由とともに英語で表現するというものである。

WGでは、問題作成当初からリスニング・リーディング・ライティングを融合させた問題を出題するという方針のもと、場面設定において、適度な情報量、表現の明確化等に配慮し、生徒にとって、誤解や迷いが生じないよう注意を払いつつ作業を進めた。また、アドバイザーからの「条件を精選し、より実際の生活場面に近づけるとよい。」という助言も生かして、今回の問いに決定するに至った。

今回は初めて3技能を融合させ、生徒の理解力・判断力・表現力を見る問題を作成した。必要な情報を取捨選択する力、その裏づけとなる理由を述べる力を育成することは喫緊の課題である。学校での英語教育において、単に聞く活動、単に読む活動、単に書く活動を個別に行うだけでなく、実際の使用場面を想定した統合的な活動がなされる、1つの提案とした。

② 小学校理科ワーキンググループ

テーマ「身の回りにおける疑問や課題を科学的に調べ、思考を積み重ねることで解決する」

昨年度に引き続き、思考力を問う問題を出題したいという方向性のもと、WGでは、問題作成にあたり、まず題材となる科学的事象を選ぶことから作業を進めた。具体的には、学習内容として取り上げられるものを中心に、普段児童が目にしたたり、体験したりすることができるものを候補として考えた。

しかし、自然事象、とりわけ生物、気象に関するものについては、例外が存在するものが多く、題材として取り上げた場合、解答が確定できなくなったり、児童の思考が混乱したりするおそれが予想された。一方、小学校の学習で取り上げられる、粒子、エネルギーに関連する内容は、定性的な内容が多く、既習内容だけで深い思考力を問う問題を作成することは困難に思われた。

そこで、児童がよく知っている自然事象の1つを切り口にして、そこから生まれる疑問や初めて出会う課題を、科学的視点で解釈し、既習の知識や新たに得た知識を活用すること、および、総合的に思考を積み重ねることで解決するという探究の過程を問題にするという方針で問題作成を行った。

作成した問題の内容は、「瓶のふたを温めると開けやすくなる」という事象を、既習内容である「物質の膨張」と関連付けて考察するとともに、問題を通して膨張に関連した科学技術である「バイメタル」のしくみを学ぶとともに、身近に見られる「火災警報器のしくみ」を説明するというものである。与えられた条件のもと、身につけた知識・技能を適用し問題解決に至る思考力および、表現力を問うとともに、理科の学習が身近な生活の中にも、生かされていることを感じ取ることができる問題とした。

今回の問題そのものを授業の題材として用いることを意識して、理科における探究の過程を問題の中で展開したことにより、今後期待される授業改善の方向性を示すことができたと考えられる。

3 質問紙の改訂

SASA2014では、小・中学校の児童・生徒の学級集団におけるソーシャルスキルに関する質問項目を質問紙に新設し、調査を行った。本年度は、より詳細に分析を行うために質問項目数を大幅に増やし、「道徳」「総合的な学習の時間」「ふるさと教育」「非認知能力」の分野を新しく設定した。

「学習」についての質問項目では、各教科における新しい学力観やICTの効果进行分析するための項目、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた項目を見直した。また、道徳が重要視されていることや、学力と総合的な学習の時間の取組みは相関が高いことを受け、これら二つについての質問項目を新たに設定した。

「非認知能力」についての質問項目では、学芸大式学習意欲検査（簡易版）「達成志向」の項目をもとに、「やりぬく力」に関連する質問項目を設定し、さらに義務教育課からの要請を受けて4項目の質問を追加した。この点に関して、アドバイザーの慶應義塾大学中室牧子准教授から、質問紙調査の結果を因子分析すること、児童・生徒の回答負担への配慮、どのような目的とどのような仮説を明らかにするかという点を明らかにした上での調査設計の重要性について助言をいただいた。

「学級」についての質問項目では、昨年度から引き続き、学びのベースとなるソーシャルスキルを5項目（「傾聴力」「けじめ力」「解決力」「責任力」「共生力」）作成し、学力との関連を分析した。さらに、SASA2015では学校の教師への聞き取りをもとに、さらに関連が高いと想定される学級ソーシャルスキルについて6項目追加した。

資料3 SASA2014、2015質問紙質問項目の比較

分 野	SASA2014	SASA2015
〈生活〉について	9	11
〈学習〉（国・社・算/数・理・英）について	25(各5)	35(各7)
〈道徳〉について【新規】	/	2
〈総合的な学習の時間〉について【新規】	/	2
〈ふるさと教育〉について【新規】	/	3
〈非認知能力〉について【新規】	/	9
〈学級〉について	5	11
合計	39	73

資料4 SASA2015質問紙における追加項目の一部

- ・ 社会の授業で資料を読んだり、資料から分かることを考えたりすることが好きですか。
〈学習／新しい学力観〉
- ・ 算数の授業で、友だちの考えや説明を聞いて参考にしていきますか。〈学習／アクティブラーニング〉
- ・ 国語の授業で、パソコンやタブレット、電子黒板などを使った学習は、分かりやすく、興味がわきますか。
〈学習／ICT活用〉
- ・ 道徳の授業で、自分自身のことを見つめたり、考えたりすることがありますか。〈道徳〉
- ・ ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがあります。〈非認知能力／やりぬく力〉
- ・ 自分のクラスは、授業などで、間違いをおそれず、安心して発言できる雰囲気のある学級だと思いますか。
〈学級／安心力〉

4 新「学力調査分析システム」の構築

SASA調査結果データの入力・集計・分析は、平成10年度（第47次）より、各小・中学校に学力調査プログラムを配付することで、コンピュータによる迅速な処理を行うことが可能となった。しかし、昨年度のSASA2014からの新たな取組みによる大きな変化に、従来のシステムプログラムでは対応できず、システムの設定に起因する制限がある中での問題作成と成らざるを得なかった。そこで、今年度からはSASAにおける教科や質問紙の調査問題作成に十分な余力があり、また効率的で正確なデータの入力・集計・分析ができるように、「学力調査分析システム」（以下 新システム）の刷新を行った。新システムの具体的特徴として、以下のものが挙げられる。

(1) 調査問題設計の自由度の向上

SASAの新たな取組みに伴う調査問題の設問数・質問項目数の増加や多様な解答類型を持つ記述式問題の設定などに対応するために、新システムでは、最大設問数・質問項目数を100、各設問・質問項目における最大解答類型数・選択肢数を30とし、実用上の制限がなく、自由に調査問題設計ができるようにした。

(2) 調査結果のデータ入力におけるミスの低減、集計・分析の正確さ

新システムでは、各学校での調査結果のデータ入力ミスの低減を考えた操作性の実現を目指した。特に、解答類型の誤入力を減らすことで整ったデータを得られるようになり、分析内容の信頼性の向上につながった。また、年度毎に学校現場からの意見を参考にしたメンテナンスを行って、使いやすさの改善も図っていく。

(3) 通級・複式・特支学級への対応

通級・複式・特支学級では、カリキュラムや授業進捗の関係で、科目や設問によって解答できないことがある。このような場合でも、解答した科目や設問の結果情報だけは児童・生徒に返却し、調査後の指導に生かすことができるようになった。

(4) 汎用性の高い分析データの出力

調査後のデータをどのように分析・解釈していくかが難しい課題であったが、今年度導入した統計・分析ソフトSPSSによって信頼性の高い統計結果を得ることができるようになった。ただ、SPSSでの分析には決まった書式に整えられたデータが必要になるため、そのための一覧表を出力できる仕組みをこの新システムの機能として付加した。

(5) 個人票の改善

新システムの導入に伴って、小・中学校用としては活用しづらかった個人票を一新した。

5 個人票「ふり返しシート」の一新

SASA2014までの個人票は、教科における問題ごとの正誤と正答率、観点別・内容別の正答率とそれらを表した棒グラフの表示に終始しており、児童・生徒にとって見づらく分かりにくい上、調査問題の出来不出来が強調され、自分自身の振り返りと学力向上を図るための手立てが取りにくいものであった。そこで、SASAの意義を考えるとともに、個の学びの継続・促進のために、対象者を児童・生徒・保護者とし、学習の状況把握がしやすく、次への学習の励みとなる、より効果的な個人票「ふり返しシート」を新たに作成した。

「ふり返しシート」は、「教科のちから」「各教科のようす」「『生活・学習に関する調査』から」の3つの項目から成り立っている。個人情報と全員共通の情報を組み合わせることで、児童・生徒・保護者にとってより必要な情報を明確に示した個人票とした。さらに、この個人票を有効に活用してもらうための手立てとして、教員には配付の仕方について、児童・生徒と保護者には見方についての指針を示し、個人票を通して児童・生徒の学力と生活に関する情報を周知徹底できるようにした。以下、項目ごとに分けて、「分かりやすい」「見てもらえる」「使ってもらえる」個人票に近づけるために行った工夫について記す。

(1) 教科のちから

1月中旬に教育研究所のHP上にアップしたSASAに関する分析情報を、各学校のシステムに取り込むと、福井県の平均正答率が入ったグラフが完成する。ここでは、各教科における自分の正答率を見たり、福井県の平均正答率と比較したりすることで、児童・生徒の全体的な学力の把握ができるようになっている。平均正答率の数値は入れずにグラフ化して表すことで、数値の高低にとらわれずに学力の状態を把握できるようにした。

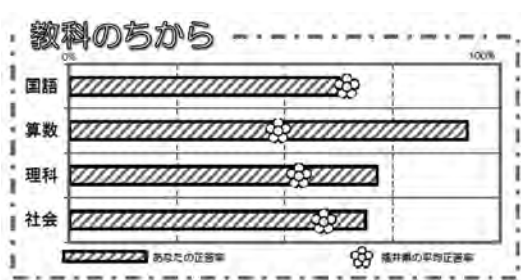


図1 ふり返しシートの一部

(2) 各教科のようす

各教科については調査問題の概要に準じ、観点と内容の2つの点から個人の正答率を表し、評価することができる。「ふり返しシート」は、児童・生徒と保護者を対象として作成しているため、あまり馴染みのない観点別の正答率の方は、レーダーチャートで表すことに留めておき、内容別の正答率の方に重きを置いて、評価と手立てを表すようにした。その際に配慮したことは、調査問題の不出来を強調しすぎるあまり、次への学習意欲をそがないようにすることである。そこで、個人内評価に重点を置くことにした。正答率が高かった内容(よかったところ)には丸印(O)とアドバイス、正答率が低かった内容(課題となるところ)には星印(★)とアドバイスが表示されるようになっているが、原則としてよかったところ・課題となるところはそれぞれ1つずつ付くように設定した。アドバイスには、これからの学習の手立てが示されており、児童・生徒本人にとっては次の学習への意欲づけ、教員や保護者にとってはサポートの方向性が分かるように記した。

国語		教科の観点	教科の内容
		話す・聞く	書くこと ★
		話すこと・聞くこと	○
		言語に関すること	
		読むこと	
<p>○…よかったところ ★…課題となるところ</p> <p>○: 「話すこと・聞くこと」に関する内容ができていました。話し手の意図をとらえながら聞く力や、立場や意図をはっきりさせながら計画的に話し合う力をさらに伸ばしていきましょう。</p> <p>★: 文章を書く際には、全体の構成を意識し、理由や事例をあげたり、事実と感想を区別したりして、分かりやすくまとめましょう。</p>			

図2 ふり返しシートの一部

(3) 『生活・学習に関する調査』から

全国学力・学習状況調査における質問項目に対する肯定的回答と各教科の高い正答率との相関関係を示したクロス分析の結果と、SASAの質問紙から見られる良好であること・課題であることの内容から、児童・生徒・保護者に発信すると有効であると思われる情報を掲載した。この項目の内容は、福井県の児童・生徒の特徴や傾向を周知することで、客観的に生活・学習面について向上すべき点がないか各々が振り返る指標となると判断し、校種別に全員共通のものとした。

Ⅲ 情報発信力の強化

1 「C チャレンジ問題」サンプル問題および通信型研修

小学校国語・小学校算数・中学校国語・中学校数学において、C問題を題材に「これから求められる学力を培う授業づくり」というテーマのもと、児童・生徒に実社会の中で直接生かせるような総合的な力を身につけるための授業提案として、サンプル問題と同時に通信型研修を配信した。以下に小学校国語の例を紹介する。

小学校国語では、全国学力・学習状況調査の結果から「情報相互の関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすること」や「条件にあわせて文を書くこと」に課題が見みられることを踏まえ、C問題およびサンプル問題の出題の意図を資料5のように設定した。

これを踏まえ、サンプル問題では「ささ小まつり」という小学校開催の祭りの場で、自分が案内係になるという児童になじみやすい場を設定した。問題作成の過程で、先述した石井准教授より「分かりやすさや相手の立場に立って考えた跡がみえるような工夫をすべきだ」というアドバイスをいただき、さらに検討を重ねた。

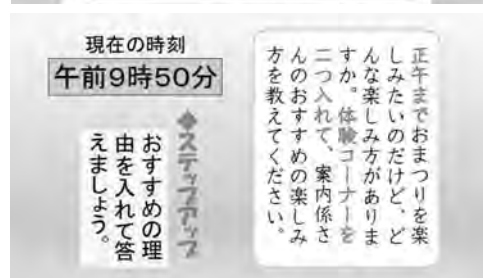
WGでは、条件にあった文を書けばよいというわけではなく、実社会の生活の中で生かせる力をつけるためには、「相手や場に応じた適切な言葉遣いや心配り」「相手に分かりやすく伝えるための話の構成」など相手意識を持って接することも重要であり、それを測れるような問題を作成しようと考えた。

通信型研修では、サンプル問題を活用した授業の展開やポイントとすべき部分を明確にし、問題作成の意図が学校教員や児童に伝わるような構成を意識した。授業実践例には、スモールステップで問題に取り組んだり、ペアやグループ学習を取り入れ、予想される（期待する）児童の反応を交えたりすることで、通信型研修を受講した教員が実際の授業を容易にイメージし、実践してみようと思えるものを配信できるよう心がけた。また、これから求められる学力を培うための授業づくりをするためには、学年を跨いで系統的に指導を行うことが重要であると考え、低学年における授業実践例も組み入れた。

資料5 通信型研修の内容（小学校国語）

【通信型研修の章立】

- I 小学校国語 C問題出題の意図
 - ・実生活で目にするような資料を読み取ること
 - ・いくつかの条件や他人からの要望に合わせて考えをまとめること
- II 授業実践例
 - ①SASA2015 サンプル問題を活用した実践例
 - ②SASA2014 C問題を活用した実践例
 - ③挿絵を活用した実践例



2 調査結果分析の報告書による発信

例年SASA（福井県学力調査）実施後、結果を分析して児童・生徒の課題を洗い出し、課題克服のために有効な指導事例を「報告書」にまとめて発信している。昨年度（平成26年度）、学力調査分析ユニットでは、研究の一環として、報告書(SASA2013)に掲載した福井県の児童・生徒が抱える課題を克服するための指導事例について、研究協力校において実践し、その効果について検証を行った。その結果、報告書で提示した実践事例について、一定の有効性が認められた。その一方で、次のことが検討事項として挙げられた。

- ・現状(SASA2013)の指導事例は、各学校で授業者が状況に応じてアレンジして利用されていることが多いと考えられる。報告書の内容を授業者がより活用しやすいものに見直す必要がある。
- ・今まで以上に指導事例の活用を促す発信を行っていく必要がある。そのために、訪問研修での情報発信を強化するとともに、新たに基本研修で情報発信を行う。

これらのことを念頭に、SASA2014の報告書作成および情報発信に取り組んだ。なお、SASA2015では、SASA2014での取組みを検証し、報告書作成および情報発信を進める。

(1) 報告書の内容改訂

報告書は、教科別調査と生活や学習、学級に関する調査の部分からなり、ここでは、SASA2014から改訂した教科に関する調査結果の報告について述べる。内容は、次のとおりである。

①「全体概要」

調査結果から明らかとなった「良好であること」と「課題であること」を示して全体概要をつかめる内容のものにした。

②「出題設問一覧（小問別正答率等）」

設問毎の選択肢(処理番号)毎の出現率や正答率の数値だけでなく、設問毎の到達目標や問題タイプ、期待正答率も合わせて提示し、設問内容を把握しながら結果分析ができる内容のものにした。

③「課題を解決するための授業改善事例」

課題克服につながり、授業力向上のヒントとなるような「学習課題」を、課題を克服するための指導のポイント、授業改善を促すヒントやアイデアとともに明確に示し、児童・生徒の実態を踏まえて、授業者の指導観・授業観に合わせてアレンジして活用、創意工夫することができる内容のものにした。

④「『C チャレンジ問題』について」

出題の意図と授業での扱いについて提示した。

(2) 若手教員へ向けての発信

SASAについてより多くの教員が理解し、SASA報告書を活用してもらうために、「SASAに関する情報資料」を作成した。主な内容は、SASA2014からの新たな取組み「問題設計」、「『C チャレンジ問題』の新設」、「『学級集団』に関する質問項目の設定」、「『学習課題』の提案」について、および調査結果の活用法「調査結果の分析」、「『報告書』内の『授業改善事例』の活用」についてである。

今年度（平成27年度）は、訪問研修では、訪問した学校の全教員に「SASAに関する情報資料」を配付してSASAについての説明を行った。

また、より多くの若手の教員にSASAについての認識を広める具体的方策の一つとして、研修部キャリア形成研修チームと連携し、教育研究所で行っている「基本研修」（5月）の中にSASAに関する情報発信の場を設けた。そして、研修の一環である「教育実践研究」（授業実践）の際に、SASA2014「報告書」にある「指導改善事例」や「C チャレンジ問題」の活用を勧めた。

その後、春の研修でSASAに関する情報発信を行ったことで「報告書」等が活用されているのか把握するために、基本研修参加者に対して、アンケート「SASA2014『報告書』の活用について」を実施（1

1月中旬～12月上旬）した。結果は、次のとおりである。

資料6 アンケート「SASA2014『報告書』の活用について」集計結果

アンケート【SASA2014「報告書」の活用について】（2015.11.～12.実施）									
(1) SASA「報告書」が、県教育研究所HPにアップされていることを知っているか。									
	全体	小学校	中学校	県立	1年目	2年目	3年目	5経年	10経年
1 知っている	72.0%	87.4%	81.4%	37.4%	63.9%	73.8%	80.3%	79.7%	62.5%
a DLした	12.0%	15.3%	11.1%	3.0%	7.4%	12.9%	14.4%	11.2%	15.4%
b DLはしていない	80.3%	76.6%	80.6%	92.5%	87.0%	82.8%	78.8%	71.4%	81.5%
2 知らなかった	27.8%	12.6%	18.6%	62.0%	36.1%	25.4%	19.7%	20.3%	37.5%
人数	669	269	221	179	169	126	147	123	104
(2) SASA2014「報告書」にある「課題を解決するための授業改善事例」を授業実践に活用しているか。									
	全体	小学校	中学校	県立	1年目	2年目	3年目	5経年	10経年
1 よく活用している	0.1%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%
2 ときどき活用している	9.6%	15.2%	10.4%	0.0%	1.8%	11.1%	13.6%	13.0%	10.6%
3 今年度中に活用する予定である	11.8%	14.5%	17.6%	0.6%	7.1%	15.1%	9.5%	16.3%	13.5%
4 あまり活用していない	28.4%	38.3%	30.3%	11.2%	21.3%	29.4%	37.4%	27.6%	26.9%
5 活用していない	49.6%	31.6%	40.7%	87.7%	69.2%	43.7%	38.8%	42.3%	49.0%
人数	669	269	221	179	169	126	147	123	104

アンケート結果より、SASAを実施している小・中学校では報告書が教育研究所のHPにアップされていることがよく認識されている（80.0%以上）が、ダウンロードの状況は芳しくない。また、報告書内にある「授業改善事例」の活用度は、高いとは言えない。「（あまり）活用していない」理由としては、「日々の業務で精一杯で、余裕がない」、「実施教科ではないため」、「低学年の担任であるので、あまり関係ないことのように思える」、「どう活用すれば良いかわからない」というものが多く見られた。「活用している」場合、教科としては国語、算数、数学が多く、「学習課題」を用いての「授業実践」の他、調査問題や報告書内容を「授業づくりの参考」「問題の解説」「考査問題や類似問題、ワークシート作成の参考」「復習の課題」等に活用していた。

SASA2014報告書にある「課題を解決するための授業改善事例」を授業実践に活用した例を、以下に示す。

① [小学校国語]

単元名：リーフレットを書こう

～考えたことを発信し、一人一人の感じ方に違いのあることに気付こう～

教材名「ちいちゃんのかげおくり」（小学3年）

単元の目標： ○同じ作者の作品を読んで、好きなところや心がひかれるところに着目しながら感想を述べたり、感じ方の違いに気付いたりしながら物語を読もうとしている。

◎物語を読んだ感想を文章を引用して書き、それを発表し合あうことで一人一人の感じ方について違いのあることに気付くことができる。

○言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くことができる。

◇活用した【学習課題】

◎登場人物の性格、気持ちの変化、心情を読み取る。 地の文からも人がらや気持ちを読み取る（行動を中心に） 光村3年下 「モチモチの木」 (SASA2014 報告書 p. 6)
◎言語活動例を取り入れた授業実践例 おすすめの本を紹介するポスターに書く、とびっきりの文を見つける。 光村3年下 「モチモチの木」 (SASA2014 報告書 p. 7～8)

学習課題に示されている〈指導のポイント〉を参考に、一番心を打たれた場面を中心に、作品中の文を引用してリーフレットを作成して発表し合うことで、同じ物語を読んでも心に残る文が違ったり、同じ文でも感じ方に違いがあったりすることに気付く言語活動を実践した。

◇学習の流れ

- 授業者の好きなあまんきみこ作品「山ねこ、おことわり」の読み聞かせを聞き、授業者が作ったリーフレットを見て、感想を交流する。
- 「ちいちゃんのかげおくり」を読み、最初の感想をノートに書いてから、学習課題「ちいちゃんのかげおくりリーフレットを作ろう」を設定する。
- あまんきみこの他作品を並行読書する。
- 「ちいちゃんのかげおくり」を繰り返し読み、人物の行動や気持ちの変化、場面の移り変わりを読み取る。
- いちばん心を打たれた場面と選んだ理由を自分の経験と併せてノートに書き、発表し合う。
- 物語を読んで考えたことやちいちゃんの生活と自分の生活とを比べたことをノートに書く。
- ノートを見ながら、ちいちゃんのかげおくりリーフレットを作成する。
- ちいちゃんのかげおくりリーフレットを交流し合い、感想をコメントカードに書いて発表する。
- あまんきみこの作品の中から自分の好きな作品を1つ決めてリーフレットを作成し、友だちと交流する。

◇学習課題を活用した授業を実践して

単元の導入部分で授業者が作成したリーフレットを提示することで、児童は見通しを持って学習を進めていくことができた。単元の終わりには、ちいちゃんのかげおくりリーフレットと自分の好きな作品のリーフレットを完成させ、児童は達成感を感じていたようである。

また、併せて並行読書を進めたことで、図書館、図書室から借りてきた本を一人平均23冊読むことができた。多くの読書の中から友達に紹介したい本を一冊選ぶ活動は、多くの情報の中から自分に必要な情報を目的によって選び出す力の育成につながったと考えている。

報告書にある学習課題を活用した授業に取り組むことで、これまで経験してこなかった実践をすることにつながり、関連する書籍を読むなど教材研究に対する意識がさらに高くなった。



② [中学校国語]

単元名： 「矛盾」 — 故事成語と自分の生活を結び付けて考えよう — （中学1年）

単元の目標： ○ 故事成語のもとになった漢文に表現された内容に関心を持ち、いろいろな故事成語を知ろうとする。

◎ 現代に生きる故事成語について理解を深める。

○ 漢文特有のリズムを味わい、訓読に必要なきまりを知る。

◇活用した【学習課題】

◎故事成語劇場
 — 故事成語と自分の体験とを結びつけて4コマ漫画を作る — （SASA2014 報告書 p.100）

「矛盾」は中学校で初めて学習する古典教材の1つであり、古典を身近なものとして感じ、興味をもって学習する姿勢を育てたいという思いがあった。故事成語は、現代にも通じるものであり、日常生活に置き換えて4コマ漫画を作ることで楽しみながら故事成語について理解を深めるとともに、古典に親しみを感じるきっかけにもできると考え、「故事成語劇場」を活用した授業を実践した。

◇学習の流れ

- いろいろな故事成語の意味を確認する。
- 故事成語を1つ選び、故事成語の意味と日常生活を結び付け、起承転結の構成に沿った4コマ漫画を作る。
- グループで作品を見せ合い、内容と故事成語の意味が合っているか、日常生活でありそうだと納得できるかという観点に沿って感想を交流する。
- クラス内だけでなく他のクラスの生徒の作品も見て学ぶことができるよう、教室前の廊下に掲示する。

◇学習課題を活用した授業を実践して

4コマ漫画を作る活動ということで、生徒が意欲的に学習に取り組んでいた様子が印象に残った。中には1つ完成したら2つ目3つ目と、違う故事成語で4コマ漫画を作った生徒もいた。4コマ漫画を作るために、国語便覧を使い故事成語について調べ、さらにグループ学習で他の生徒が作った4コマ漫画を見て感想を交流したことで、様々な故事成語とその意味を理解することができた様子が見られた。



生徒の作品を廊下に掲示したところ、他のクラスの生徒の作品も見ており、4コマ漫画を使って学習することは、生徒の興味をひく効果があると感じた。

また、学習をした数週間後に行われた定期テストでは、故事成語の問題を多くの生徒が正解することができており、学習の成果が見られた。

以上、2つの事例を示したが、実践した授業者からは、報告書に提示してある学習課題について、「実際にやってみて、どの生徒も取り組みやすい学習課題で、学力の低い生徒にも効果的だと感じた」、「学習活動での観点が明確にされていたので取り組みやすかった」等の評価の一方で、「参考になる関連図書が明示されていると、より教材研究が進めやすい」、「学習活動について、具体例が示されているとより取り組みやすくなる」などの指摘があった。今後の報告書作成の際の参考としたい。

IV 今後の方向性

1 C問題の意図の周知

C問題には、今後子どもたちに必要とされる力を身につけるための授業改善を促すという意図がある。このことをさらに教員全体に周知していく意味で、今年度は、C問題サンプル問題の発信、通信型研修の実施を行った。特に通信型研修においては、視聴者数も多く好評を得ている。来年度は、今年度実施できなかった教科についても、通信型研修の配信を行っていく。

2 新学力調査分析システムを有効利用したSASAの充実

今年度システムを刷新したことにより、学力調査問題の設問数、解答類型数、質問紙で実施することのできる質問項目数を大幅に増やすことが可能になった。今年度は、システム刷新の時期が、問題作成の時期に間に合わず、問題に反映することができなかったが、来年度以降は、より詳しい結果分析ができるように、問題設計の際、よりきめ細かい解答類型の設定に取り組んでいく。このことにより、これまでは把握できなかった児童・生徒の思考のつまずきを取り上げることができると考えている。

なお、新システムにおいて、いくつかの不具合や運用上の課題も見えてきた。これらの点については、その都度対応してきたが、来年度に向けてシステムの安定化に早急に取り組んでいく。

3 個人票「ふり返りシート」の改良

調査問題の正答率の低い児童・生徒を常に念頭に置きながら作成したことで、どの児童・生徒にとっても個の学びの継続・促進を図る個人票になったと思われる。また、正答率が同率の場合も優先順位をつけることで、表示されるアドバイスを1つにするという原則は大切にしつつも、80%以上の正答率の場合は、「全体的によくできています」というコメントが追加されたり、丸印が追加して付いたりするように条件の設定を行った。多様な条件設定が、個へのきめ細かい配慮と対応を可能にした。今後は、学校での個人票の活用状況を調査しつつ、アドバイスの文章のパターンを増やし、個への具体的な学びの指針となるような個人票を目指して改良を加えていきたい。

4 さらなるSASA報告書活用の促進

今年度は若手教員研修の際、SASA報告書の活用状況の調査を行った。今後も経過を見ていくために調査を続ける必要があるのと同時に、さらに詳細な実態を知る上でアンケートの内容を改善していこうと考えている。

昨年度来の広報活動も功を奏し、報告書自体の認知は高くなってきた。しかし、実際に活用されているかについては、未だ課題が多い。さらなる広報活動も重要であるが、掲載されているホームページの使いやすさや、必要な部分を検索しやすくするなど、利用してもらうための工夫も考えていく必要がある。

《参考文献》

- 調査研究部学力調査分析ユニット(2015)「「SASA2013(第62次福井県学力調査)」の課題を克服する授業改善」『研究紀要』第120号、福井県教育研究所、pp. 57-68
- 調査研究部学力調査分析ユニット(2015)「「SASA2014(第63次福井県学力調査)」での新たな試みについて」『研究紀要』第120号、福井県教育研究所、pp. 47-56
- 福井県教育委員会「SASA2014第63次福井県学力調査報告書」
- 堀洋道監修(2007)『心理測定尺度集Ⅳ』サイエンス社